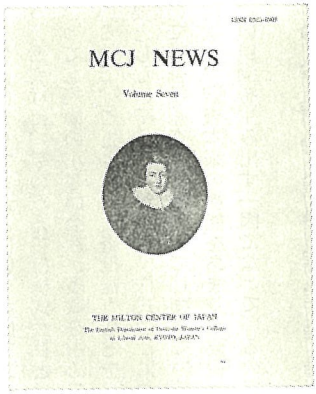


越智文雄元女子大学長に聴く

恩師・ミルトン・女子教育

聴き手　河野仁昭

今治市とキリスト教

――先生は今治市のご出身だとうかがってますが。

越智　生まれたのは広島で、七歳のとき今治へ移ったのです。出生地は広島、出身地は今治、今治がもともと、ふるさとです。

そこで小学校を終え、旧制今治中学校、いまの今治西高等学校に学びました。

――野球がつよい学校ですね。

越智　甲子園で準優勝くらいまでいくんですが、残念ながら優勝はしません。今治は野球が好きな所ですよ。

――キリスト教が入るのも早いですね。

越智　そう、松山と今治が愛媛県の拠点だったようです。同志社出身の露無文治という牧師がおられて、私の家などへもちょいちょい立ちよられましたりね。神学部の飯峯明先生の祖父のころからお家が回船問屋で、私の家と裏表で庭つづきだったと聞いたことがあります。

そのころの今治教会は海岸通り近くにありましたが、私たちが朝七時ごろ、小学校へ行きがけに鐘が鳴るのです。「あ、教会の鐘が鳴っている」という感じで聞きながら小学校へ行きました。信者でなくてもそういう恩恵を受け、町の人々に親しまれていたのです。私は当時はまだ、クリスマスのプレゼントをもらいに教会へ行くだけの子供でしたが。

――洗礼はいつ？

越智　大阪にいた姉が早くからクリスチャンで、その勧めで同志社へ入ったようなものです。私は昭和三年に同志社へ入学したのですが、姉の家庭が世話になっていた大阪の島之内教会の牧師が山口金作先生で、私が同志社へ入ったころは京都の平安教会に移っておられました。私はそこで洗礼を受けました。牧師さんが保証人だから、日曜日には必ず教会へ行かねばならないことになって。（笑）

――今治時代から同志社人と関係がございますね。

越智　今治の教会も同志社と同じく組合派だから。今治教会は戦災で焼けましたが、それを駅の近くに移し、再建されたのは奇しくも上野イト先生の娘婿さんでした。

同志社大学予科のころ

――先生が入学されたころ、教室は有終館

でしたか。

越智　私はフランス語クラスでしたが、いまの本部庶務課の部屋が教室でした。それから、当時木造だった弘風館、いま明徳館が建っている所にあった平屋の木造校舎などもよく使いました。

クラーク神学館があって、煉瓦建ての建物が並んでいて、ランチ・タイムなどグリークラブの讃美歌練習のうたごえやオルガンが聞こえてくるんです。公立校とはちがうなァと思いました。

――フランス語をとる学生は多かったんですか。

越智　いや、一クラスだけ。あとはみなドイツ語で、五クラスくらいあった。ドイツ語クラスは毎年編成替えがありましたが、フランス語は変えようがない(笑)。だから三年間ずっと持ち上がりでしてね、平石善司さん、故中村貢先生の弟さん、冷泉家の西隣り(現徳照館の位置)に邸があった藤谷子爵の次男坊などが同じクラスでした。

――有終館が焼けたのは、入学された年ですね。

越智　私は下宿にいたので知らなかったのですが、朝号外が出ているし、大学の東門を入ると消防のホースがいっぱいで……。予科長の速水藤助先生が放心状態で立っておられたのが、いまでも目に残っています。

ご大典の後で天皇陛下がまだ御所におられたものですから、申しわけないというので海老名弾正総長は引責辞職されるし、学生会委員たちはみな坊主刈りになりましてね、大騒動でした。

英文学科と恩師たち

――英文学を専攻しようと思われたのは、なにか動機があって？

越智　神学科へ行こうか、哲学をやろうかといろいろ迷ったのです。今治という所は商業や貿易の町でもありますから、そういうことの役に立つ英語なら認めてもらえますが、文学などやるといったら男の中に入れてもらえないような雰囲気がありました。(笑)

――わかる気がします。

越智　私、教会へよく行っていましたし、クラーク神学館二階の講堂で毎朝おこなわれていた説教や、その他の講演会にもよく出ていて、神学科の人たちとも親しかった。

――説教は、毎朝あったんですか。

越智　そう、休暇中を除いて、授業前に二十五分か三十分。出席は自由でした。いろんな先生方のお話がきけるわけですよ。あの講堂の壁には、同志社の先輩の写真がたくさん掲げられていましたが、いまもありますか。

――全然ございません。

越智　そのころはマルクス主義が非常に盛んで、若いマルキストはいまにも革命が起こるような熱気で議論をしかけてきた。私なども若いだけにその刺激は受けましたが、それにキリスト教で対抗しようというわけでもないですが、私にはずっとキリスト教的な考え方がありまして反論もしました。哲学科の人人とも親しかった。当時は神学科も英文学科も哲学科もみんな文学部の中にあったし、人数も少なかったから、先生方とも親しくなれたんです。

いろいろ考えた末、結局英文学科に進むことにしました、英語は好きでしたから。

英文学科の一級上に貞方敏郎さんがいましたが、そのクラスは十三名。私たちのクラスは四十五名で、それ以前と比べていちばん多い年でした。

越智文雄名誉教授

――同じ文学部の中なら、三学科に共通する科目もあるわけですね。

越智　いろいろありました、例えば神学科の古典語がそうで、京都大学の田中秀央先生が講師でしたが、その授業に出てラテン語やギリシャ語を学びました。そんな関係で、のちに翻訳をやってみないかと先生にすすめられました。

――外来講師とのつながりというのは、いまは考えられないかもしれません。

越智　演劇通の山本修二先生も講師できておられました。それから、バルザックやロマン派時代のフランス文学をやっておられた太宰施門先生。先生からはフランス語、フランス文学を学びましたが、該博で実におもしろい先生でした。あるとき、「新聞なんか十年読まなくてもいい」といわれたのが、いまも印象に残っています。学生たちはいま起っている問題にすごく興味があって、何か現実とかかわるような議論をやりたいと思っているわけでしょう、そういう気持に水をかけられたんです。学問というのは、そういうものかと思いましたね。

F・L・ハントレー先生

――専任にはどのような先生方が。

越智　いちばん影響を受けたのは、ハントレー先生からでした。米国のオベリン大学で教えておられた方で、それから同志社大学へこられました。英文学が専門でした。

――ミルトンを習われたんですか。

越智　いや、ミルトンは習わなかった。先生は授業の中でイギリスの詩を美しいバリトンの声で朗読されるのです、キーツ、シェリー、バイロンなどの詩ですね、それがとてもいいんです。

文学といえば小説、せいぜい劇を思いうかべる人が多いようですが、英文学の本流は元来詩ですからね、日本でもそうでしょう。そういうことを教えられました。よく詩の分析をさせるような宿題を出されましてね、「ワーズワースの自然哲学と芭蕉を比較せよ」なんていう宿題を、英文学科に入学して間もなく出されるんです。

ハントレー先生は日本語はあまり読めなかったんじゃないかと思いますが、ものすごい勉強家でしたねえ。いつも目を充血させていました。また二学年ではシェークスピアの『マクベス』と『十二夜』とを一年間に。また、ブラウニングとかテニソンとか、お一人でなんでもやられるんです。とにかく、英詩というものは素晴らしいものだ、文学というものは面白いものだということを、先生から教えていただきました。

――素晴らしいことですね、授業で文学のおもしろさが伝えられるというのは。

舟橋雄先生のことなど

越智　ほかには、弘前高校から来られた勝田孝興という先生がおられましたが、先生の専門はアイルランド文学で、当時としては珍しかったのです。イェーツとかジョイスなどがアイルランドから出ていますが、そういう文学研究の先鞭をつけられた方です。朴訥な

先生でしたが。

――舟橋雄先生にもそのころ？

越智　そうそう、ムッソリーニのような容貌でしたね、精悍な感じで。でも、話はユーモアもあってとても面白かった。ダンテやチョーサーなどの講義でした。文学史なども書いておられますが、範囲はとても広かった。

ハントレー教授を囲む英文学科上級生（昭和８年頃）

先生は青山学院を出られて、シラキューズ大学に学んだ方と聞きましたが、いい時代のアメリカでの文学教育を受けられた方でしてね。いま同大英文学科の図書室にアメリカ文学のいい文献が豊富にあるのは、舟橋先生が集められたものだといわれています。先生は批評書などよりも、小説とか文学作品そのものを買われた。当時の東京高等師範学校の福原麟太郎という方をご存知ですか。

――はい、随筆で。

越智　あの福原先生が、ある年、修学旅行に来たといわれて、学生を十名ばかり連れて英文学科の書庫を見られたことがあるんです、いいコレクションだからと。福原先生は舟橋先生を心から尊敬なさっているんです。「この人の右に出る者はない」と褒めちぎっておられました。舟橋先生は原書を読むスピードが抜群だったというのです。話も早口でしたが、英語をしゃべるような日本語ですよ。（笑）

同志社高等女学部のころ

――昭和九年に大学を卒業されて、すぐ高等女学部の先生になられたんですか。

越智　そうです。いまの女子中高の前身ですね、日本が戦争への道を突走る時期にあたります。十三年ほど勤めました。大学を卒業する前の年の暮れ、授業の終りに、ハントレー先生から呼ばれ、片桐校長に会いに行くようにといわれた。指定されたデントン・ハウスでお会いすると、来年四月から高等女学部の教師を引きうけてくれといわれるのです。「君は勉強がしたいようだが、ここは大学にも近いからいいだろう」というわけです。私も勉強を続けたいと希望していたから、大学に近い所が都合がよかったのです。

そんなことで、暇を見て、大学での研究会などにも出ましたり、田中秀央先生から勧められてギリシャ語、ラテン語を続けて受講にも行きました。浜田与助、今井仙一、村岡景夫といった大先輩もクラスに来ておられましたが、そのうちに気がついてみると、いちばん若い私一人になって。（笑）

――熱心だったんですね。

越智　熱心というより、逃げ遅れたということです（笑）。そんなことで田中先生にも親しくしていただきまして、「何か翻訳をやっ

てみんか」と勧められたものですから、ウェルギリウスの『田園詩・農耕詩』をやることにしました。これは偶然、河原町の古本屋にいい版のが出ていたものだから、買って持っていたからです。日本ではまだ翻訳が出ていなかった。戦時中、三度も戦争に召集されましたが、この翻訳をすることがせめてもの救いでした。その原作は、昆虫学者のファーブルが愛読して止まなかったものです。

――英文学会の『研究パンフレット』にも早く書いておられますね。

越智　あれ（「青少年期のミルトン」昭和14・7）は上野直蔵先生が編集をしておられ、勧めて下さったのです。その前に、たしか昭和十二年だったと思いますが、舟橋先生が私の下宿へわざわざ来て下さって、「今度、関西学院で英文学会があるんだが、君、同志社の代表で何か発表してくれないか」といわれるんです。ほかに人がいないといわれるのでお引きうけしたのですが、それが私の研究のいわば処女発表でした。東京大学の斎藤勇先生が英文学会の会長で、竹友藻風、市河三喜、土居光知といった先生方も、そのころはまだ壮年の学者といったお元気な姿でした。

――若手の研究者ということで、注目されていたんですね。

越智　そうじゃない、戦争になって先生方がどんどん召集されるでしょう、だから私たち残されていたものがやらざるをえなくなったんです。

デントン先生のこと

――先生は大学時代にグリー・クラブに入っておられたようですね。

越智　一年半ほど、セカンドテナーでしたが、歌っていると気持がいい（笑）。栄光館で同志社交響楽団といっしょにやったり。

――混声合唱などあったんですか。

越智　あったと思いますが、男子と女子がいっしょにやるなどということは極度に警戒されていました、デントン先生もおられたし。（笑）

――デントン先生はきびしかったようですね。

越智　文科系で、独身者で女学校の教員になったのは私がはじめてのようでした、いちばん警戒されていたかもしれません。（笑）

デントン先生は立派な方で、百万言を費やしても褒め足りないし、すでにいろんな方がいってもおられますが、あまり知られていないエピソードを一つ紹介しておきましょう。あるとき女学校の教員室へ杖をついて入ってこられました。いきなり、「バッド・ペンマンシップ！」と怒鳴られるのです。生徒に英語の宿題を提出させたら字がまずい、「英語の先生しっかりしなさい」というわけですよ。（笑）

――デントン先生の字もすごいですが。

越智　だから私、「先生のような偉い方はあまり字がお上手じゃないから」（笑）、そういって苦笑したことがありました。

先生は、生徒が口紅でもつけて来ると追っかけまわして、トイレへ連れて行きまして、「洗ってきなさい、外で待っている」といった調子でしょう、礼拝の欠席などについても厳しかった。先生は結婚されなかったしお子さんもなかったですから、教え子はみんな自分の子供と思っておられた。だから叱るときは厳しく叱るのでしょう。

デントン先生にかぎらず、宣教師の独身の女の方は大体そうでしたね、ヒバード先生なども、ピューリタンというか。とにかくアメ

リカの民主主義、あるいは個人主義といものは、だらだらしていないのです。自由というものはだらしないものだと世間から思われがちでしたが、そうじゃないのですね。

同志社の自由・自治・良心

越智　同志社は自由だからだらしがないと京都の人には思われてきたんですね。しかも耶蘇教の学校だというわけで、当時は京都からの進学者はとても少なかった。おまけに、戦前には女の子を女子専門学校まで行かせるような家庭はとても少なかった。片桐哲先生など、生徒を集めることで随分ご苦労なさったんです。寄宿舎を増設し、地方からの進学者の募集に力を入れておられた。

「自由」に関連して思うんですが、同志社は「自由、自治、良心」ということを教育のモットーとしてきましたね。

舟橋雄先生

――はい。

越智　これは笑い話のようなことだけど、戦後も四十年たったこんにち、もう「自由、自治」は同志社がいわなくてもいいんじゃないか、日本の民主主義も戦後四十年たつと、「自治」も地方自治とか自治的な考え方が国民の間に相当浸透してきて、自立心もまァ出来てきました。だから同志社があまり主張しなくてもよくなってきているんですね。残るのは「良心」、これが大切だし、またむずかしい。どういう意味での「良心」か、といった問題もありますから、その意味を掘り下げるとか、教育にどう結びつけていくかとか、同志社がなすべきことはこれではないか。

――「自由・自治」には、それなりに歴史的な意義はあったわけですが。

越智　そう、それは十分あった。

女子専門学校から女子大学へ

――先生が高等女学校から女子専門学校へ移られるのは戦後ですか。

越智　私、三度も召集されましてね、終戦のときはヴェトナムにいました。引き揚げてきまして、報告を兼ねて片桐先生にご挨拶にうかがいましたところ、「この機会に女専へ来てくれないか」と言われるんです。片桐先生は元は女専と高等女学校の両方の校長をしておられましたが、そのころはもう女専だけの校長になっておられました。私もどちらかというともう少し勉強がしたかったので、女専へ移ることになったわけです。昭和二十二年四月からでした。

――そうしますと、女子大学の開設準備などもされたわけですね。

越智　女子大の開校は昭和二十四年四月ですからね。私はまだ女専へ移ったばかりで、加藤謙爾、福原春代、中村貢といった先生方が女専の専任としては古かったですから、私はちょっとお手伝いをする程度でした。

女専と女子大をかけもちするという時代がそれから三、四年続きました。

――男女共学の大学があるのに、わざわざ女子大学をつくらなくてもという意見があったように聞いていますが。

越智　湯浅八郎先生が総長をなさっておられたころでした。アメリカの教育視察団が日

本は共学にしなくてはならぬというと、日本はあげて共学指向なんです。共学にしないと犯罪でも犯しているような雰囲気でした、肩身が狭いんですよ(笑)。しかし、アメリカで勉強された方ならおわかりのはずですが、むこうにはいい女子大学が沢山あるわけですね、たとえばコロンビヤ大学と道路をひとつ隔てたバーナード・カレッジ、両校の間には共通のコースなどもあるのです。それからハーヴァード大学とラドクリフ・カレッジとか。だからアメリカがみんな男女共学かというとそうじゃない。歴史のある優れた女子大学が、スミス、ブリンマー、マウントホーリヨークなど外にもたくさんあるのです。そして女性が男性に劣らず自立心を持っている。

——日本では女子教育の目標をどこにおくか、実学を除いて、あまりはっきりしていなかったように思いますね、だから共学でいいじゃないかということになる。同志社女子大学はリベラル・アーツということで。

越智　リベラル・アーツというと、日本ではまだ花嫁学校かと誤解される恐れがあるのですね。一般に実学主義でしたから。だから、リベラル・アーツは大事なスピリットだからこれは残さなければならぬ、しかし、十分な理解をえるのは仲々むずかしいだろうと思いましたね。

——教養とか教養教育というのは、日本では理解されにくいようですね、女子に限らず。

越智　新島先生も女子教育についてはあまり詳しくは語っておられないでしょう。

——そうです。

越智　だから余計にむずかしい。どういう方針で教育をやればいいか、学長とか現場の先生が考えながら創造していかなければいけないのです。

女子大学長時代

——先生が学長に就任されたのは、昭和三十六年でしたですね。

越智　三十六年の七月です。私、その年の三月から外国へ出かけることになっていたのです。ところが加藤謙爾学長が突然二月に亡くなられて、その後任になるよういわれましてね。理事会の決定なのです。「学長なんて柄じゃないし、それに外国へ行く予定で英米の諸大学にもう約束もとってあるのだから」と辞退しましたら、「三カ月間海外研修に行っていい、帰るまで就任を延期するから」と、すべて理事会で決めてしまいましてね。

——外国へは行かれたんですか。

越智　短期間でしたが行きました。帰ったら学長にならなくてはいけないから、予定を多少変更して英米の著名な女子大学訪問をスケジュールにおりこみました。

——学長時代にいちばんご苦労なさったことは、やはり財政問題でしょうか。

越智　当時の秦孝治郎理事長さんがね、いろいろいうんですよ、赤字を出さないようにとか、授業料をなんとかしろとか。なにしろ女子大は学長が経理責任者ですからね。私はそういうことが本当に苦手なのです、でもそんなことといっておれませんから、いろいろやりましたけれども。

ご存知と思いますが、アメリカの有名私学では経営スタッフが責任をもって資金集めをやりますね、そのために思い切った人事をやって、財界や政界に顔のきく人を学長などに起用しますね。それから膨大な基金をもっている。アーモスト大学など、学生数は八〇〇人か、せいぜい一〇〇〇名程度でしょう、だ

けどその予算は全同志社のそれと同じくらいですからね。「金のことは心配しなくていいから、いい教育をして下さい」。これが経営スタッフの姿勢ですから、いい教育ができますよ。同志社を含めて、日本の私学はその逆なんですね。

——まず金のことを心配して下さい。(笑)

越智　だから学長なんて本当に大変な仕事なんですねえ、夏休みも満足にとれない。

——なぜですか。

越智　だって経理責任者ですから、学長室へ座っていて書類の決裁をしなきゃいけない。事務は夏休み中も動いているんですから、夏休みだといっておれない。

——田辺校地の利用に着手したのは、先生が学長のときですね。

学生時代の越智名誉教授

越智　家政学科を学部に独立したいという要望がでて参りましてね。独立させるといっても中心校地が足りないから、文部省が認めない。たまたま田辺に用地を買って間もないときでしたから、何もせずに放置しておいたのでは約束違反になるし、田辺町に対しても申しわけがない。私は理事でしたから事情はわかっているのです。そういった問題もありまして、とりあえず三万坪ほど整地して、廃材を利用して四、五十人ぐらい合宿できる課外活動施設をつくったのです。あの建物、二十年ちかく使ったでしょうね。最近、女子大の田辺一部移転のため取り除かれました。

——女子大学に大学院を設置(英文学専攻、昭和四十二年。家政学専攻、昭和四十三年)されたのも、先生が学長をなさっていたときですね。

越智　津田塾大学が比較的早くから大学院を設けていまして、それが目標といえば目標で。私、当初は修士課程ぐらいでとめておこうと思っていたのですが、博士課程もつくることになって(昭和五十年)。まァ、同志社大学と制度上あまり格差がない方が学生のためにもいいでしょうし、一貫教育という点でもいいんじゃないかと思いましてね。

——研究所も設けられましたから(昭和四十年)、女子大学の研究体勢がととのったという印象をうけます。

越智　教育と研究をどうとらえるか、これはむずかしい問題です、両者は一体のものだという考え方もあるし、分けるべきだという議論もありますからね。

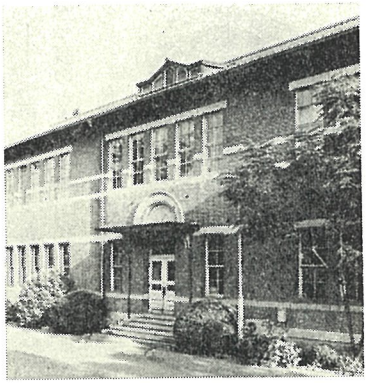
——女子大学は『研究年報』を学部単位で分けないで一冊にまとめて発行してこられましたが、あれは何か理由があってですか。いまは三分冊になっていますが。

越智　ボリュームの点で分けることにしたんでしょうが、ひとつにまとめるとリベラル・アーツの建前からも、ある程度筋が通るし、先生方の横の連携の点でも意味があると思うんです。いまは研究所で共同研究をやって、横のコミュニケーションもおこなわれていますが。

それで思い出しますけれども、この『同志社時報』、私が理事のときに出すように勧めたのですよ。一部の反対はありましたが……

——そうでしたか。

越智　学内でのコミュニケーションが不十


ミルトン・センターのあるゼームズ館

分だから、何か学園全体の機関誌があった方がいいといって。それから長い目でみて歴史的な記録をとどめておくという意味もありますからね。女子大学の学報『しばぐさ』を出すようになったのも（昭和三十七年創刊）私が学長のときです。

――学長は不向きだといわれますが、随分いろんなことをやられて……。

越智　大学紛争などがあったでしょう、栄光館さえ使えなくなった時期があったのです。私はなにしろ、五十一歳から六十五歳（昭和五十年）まで学長をやったのですから、疲れましたねえ、くたくたになってしまった。

ミルトン研究

――いちばんお話をきかせていただきたかったことが最後になってしまいましたけど、先生は戦後すぐにギリシャ、ラテンの古典文学の翻訳をなさっており、昭和二十八年には『ミルトン研究』を出版なさいますが、先生のミルトン研究の方法を、私のような門外漢にもわかるようにお教えいただけますとありがたいですが。

越智　田中秀央先生に勧めていただいてギリシャ、ラテンの文学などをやり、上野直蔵先生の勧めで研究パンフレットをまとめるなどしています間に、ダンテからミルトンへというヒントを得ましてね。宗教文学というか、同志社でやるからにはキリスト教に関係があって、しかも歴史や時間の風雪に耐えるような文学にアタックしたいと思っていたのです。

私はまず、ミルトンは変化するんだというとらえ方をするんです。ピューリタンだと頭から決めてしまわないで、あるがままに作品を見る。するといろんなものが見えてくる。

この詩人のイタリア語の詩、ラテン語の詩、ギリシャ語の詩などですね。書簡もラテン語で書いたものが多い。英文学をやる人なら英語が読めるのは当然ですが、ラテン語、ギリシャ語は避けて通る、そういう傾向がありました。私は避けないで丹念に見ていったのです。

――ラテン、ギリシャの文学をマスターされた強味ですねえ。

越智　私の本を見ていただいたらわかって下さるでしょうが、私はミルトンの横の関係、あるいは斜の関係、そういった軸を設定しましてね、比較文学ないし文化的な視野をもってミルトンを見るのです。もちろんプロパーの問題もありますが、ホメロスとミルトン、ヴァージルとミルトンといったふうに――。彼は古い地中海文化、つまりギリシャ、ラテンの文化ですね、それからイタリア、それらの影響をすごく受けている、だからあのころあこがれてイタリアへ旅行したりするわけです。そうした影響とか、さまざまの関連や流れを見る、あるいは追跡するわけです。一つの作品ができるのは、単独にポンとできあがるものではないですからね。

――はい。

越智　そうしてミルトンそのものに語らせる、オリジナルそのものに言わせるのです。

――ミルトンを研究している人は、日本にも沢山いるんですか。

越智　いろいろいます。女子大学の中に、ミルトン・センター・オブ・ジャパンというのをつくったのが十年ほど前で、ミルトンが亡くなって三〇〇年の年でした。生誕三〇〇年が明治四十一（一九〇八）年で、私が生まれる二年前。『英語青年』をごらんになるとわかりますが、そのときでもいろんな記念の会が催されていますが、永眠三〇〇年というのはヨーロッパやアメリカではいろいろやられていますけれども、日本ではあまりやられなかった。

私は学長をしていて疲れていたこともあって、せめてレクイエム（鎮魂）のつもりで、以前京都大学の教授で、『明治百年にわたる日本のミルトン研究』という実証的な大著がある宮西光雄先生に講演をお願いした。宮西先生のほかにもいい研究をなさっている方が沢山います。いま、ミルトン・センターの会員は一二〇名ぐらいです。

――先生の『ミルトン研究』は、日本の戦後の研究業績の中では早い方ではありませんか。

越智　早いのです。それから『ミルトン論考』（昭和三十四年）ですね。先鞭をつけたといっていいだろうと思うのです。だから、あちこちの研究者が私の本をよく読んで下さっているようです。訪ねてもこられますし。本というものはこわいですよ、著者が寝ているときにもどこかで誰かが読んでいて、「あッ、こんな間違いがある」などと（笑）、間違いをみつけてくれたりしているかもわかりませんからね。でもまァ、それは他の人におまかせして、私は別のテーマ、新しいテーマをみつけて、どんどん先へ進みたいと思っています。

話が少しちがいますが、同志社の先輩にもミルトンをやっていた人がいるのです。それは山崎為徳、湯浅半月、徳富蘇峰・蘆花兄弟の四人です。山崎は『失楽園』を読み、一巻を暗誦しながら御所を歩いていたと伝えられている。蘇峰には『杜甫と弥耳敦（ミルトン）』という大著がありますし、蘆花は『思出の記』の中でミルトン詩集との出会いを書いています。特に蘇峰の著書など読みますと元気がでますね。自分はジャーナリストに過ぎないけれども、これだけは書いておきたいといって『杜甫と弥耳敦（ミルトン）』を書いたわけですが、日本が少しソフトになりすぎた現在、この蘇峰の文章を読みますと、「日本にもこういうものがあったんだ」という感じを強く覚えますね。それに詩的直感でもって魂をつかんでいるところがありますね。

ミルトン・センターについて

――さっきお話がありましたミルトン・センターは、どこにあるんですか。

越智　ジェームズ館の二階の一室が提供されています。

――どんなことをやっておられますか。

越智　細々とした活動ですが、『MCJ NEWS』という英文の会誌を出しています、最近第七号が出ました。この英文誌は米国ミルトン学会にも紹介され、また、米国オハイオ大学の季刊誌 *Milton Quarterly* とは学問上の姉妹関係ができ情報交換をしております。英、仏は勿論、最近はスコットランド国立図書館や、ニュージランド国立図書館か

らも購読申込みがきているものです。それから毎年十月に大会を開いてシンポジュームをやります、文学の外に社会学者や歴史学者などの会員にもご協力をいただきましてね。それから七月と十二月に研究談話会を開きますが、それもセンターがお世話をします。

そういった学会的な活動のほかに、全国の諸大学からミルトン関係の文献が寄せられますので、その整理をアルバイトを雇うなどしてやっています。さっきお話しました宮西先生、この方は明治以来のミルトン文献のビブリオグラフィーをつくられた方でして、これは八〇〇ページにもおよぶものですが、先年亡くなられ、遺族の方からそのお仕事の基礎になった蔵書を全部センターへ寄附して下さいました。

――それはありがたいですね。

越智　千数百冊あるでしょう、「宮西文庫」としていますが。こうしたセンターの資料は、いずれは同志社女子大学、ということは法人同志社の所有になります。いまのところ、大学院の学生と学部の四年生については、必要な文献をそこで利用できることにしています。四年生は必修科目に「ミルトン研究」が入っていますからね。それと「シェイクスピア研究」ですね、個人の文学者で必修になっているのは。ミルトンはプロテスタントの詩人であり、『失楽園』という、聖書の精神を英語で古今の一大叙事詩文学に開花させた詩聖でもあるからには、同志社の英文学科で学ぶにふさわしいということで。

――これからもセンターのお仕事を続けられるわけですね。

越智　これは代表者ということで責任もありますからね。それから『ミルトン論考』以後にあちこちへ書いたものがだいぶんたまってきていますから、これらをまとめて近く出版したいと思っています。

とにかく、私はミルトンをいわば基地にして、いろいろやってきましたし、今後もやっていきたい、やりたいことがいっぱいあるのです。もちろんできることもあれば出来ないこともあるでしょうけれども……。やりかけている翻訳もありましてね、これはなんとか完成したいのです。夢に終わるかもしれませんが。

七十歳を越えるといいですよ、自分のやりたいことをやりたいようにやれて。自分の世界の中で、人さまにご迷惑をかけないで。(笑)

――先生の夢というか、いろんなお仕事が完成しますことを祈っています。今日は長時間にわたって興味ぶかいお話をありがとうございました。

(一九八五年七月十八日、有終館担当理事室で収録)